

活動報告：ミュージックチャイルド

1. 「ミュージックチャイルド」について

広島文化学園大学・短期大学 子ども・子育て支援センターでは、平成22年度より特別な支援を要する幼児・小学生を対象とした音楽療法「ミュージックチャイルド」を、非常勤講師とともにやってきた。23年度から「音楽療法実習Ⅰ」の実習先として、音楽学科の2年生（音楽療法士資格取得希望者）「音楽療法実習Ⅰ」履修学生が、非常勤講師の行う音楽療法セッションを見学している。また、27年度からは、音楽療法を受けたい児童を積極的に受け入れているが、その時の助手を、音楽療法資格取得希望者に任せ、本格的な学外実習施設として機能している。

「ミュージックチャイルド」の目的は、音楽をツールとし、意図的・計画的に子どもの発達を支援することである。対象児の行動の変容や発達を促進するとともに、対象児の表現力の向上により、特に保護者が子どもの変化を喜び、より望ましい親子の愛着形成が育まれることが成果として見られている。

2. 30年度の実践報告

「ミュージックチャイルド」で行う音楽療法は、インタビュー面接をはじめとする、アセスメント、目標設定、実施計画の作成、セッション、保護者とのカンファレンスの流れで実施された。30年度は、卒業生の水谷千聖先生（旧姓静間）・植松貴子先生（旧姓吉川）（いずれも音楽療法士1種取得・音楽療法士）が担当者となり、筆者がスーパーヴァイザーを務め対象児らと関わった。また、セッションでは音楽療法士の資格取得希望者の中から、児童領域により熱心な学生を助手とした。セッションの実施回数は、対象児童Aちゃん：前・後期計20回、Bちゃん：前・後期計16回実施した。対象児童の年齢は、Aちゃん・5歳、Bちゃん・6歳。それぞれの対象児が抱える問題は、広汎性発達障害・水頭症であった。最初はAちゃんとBちゃんをそれぞれ個人セッションで考えたが、年齢的に近かったことと、Aちゃんは場面緘黙の傾向があり、Bちゃんは反対に感情表出が豊かで、ともすれば暴走傾向になったことから、小グループでのセッションを実施することにした。

3. 指導者の立場より

今年度は、卒業生を児童領域の音楽療法士の専門家として卒業後も継続して教育するために各施設で音楽療法士として活躍中の水谷千聖・植松貴子先生にミュージックチャイルドでのセッションをお願いして、筆者はセッションのスーパーヴァイザーを実施した。音楽を通しての、対象児、その保護者と関わりながら、毎回、子どもとたちとどうかわれば良いのか、試行錯誤での連続だった。最初は、ここは自分にとって安全な場所かどうかを見極めるために、固い表情の対象児たちが、音楽を通してどんどん心を開き、自己を表出できるようになっていく様子は、感動的で、実は私たちが、対象児から成長させられている貴重な時間であったと思う。学校行事や対象児たちの体調などの条件から、コンスタントにセッションが展開されなかった月もあったが、体調が少し悪く中でも、セッションに足を運んでいただくと、保護者が驚かれるくらい積極的に講師と関わる場面もみられ、音楽の可能性を再認識することが多く見られた。今後も、ミュージックチャイルドで実施する音楽療法の実践を通して、本校が児童領域の音楽療法の拠点となるべく、幅広く展開していきたいと考えている。

4. 改善点と将来構想

本年度は、講師に音楽療法をもっと勉強したいという意思をもった卒業生で音楽療法士として活躍中の先生にお願いし、セッションの組み立て方や対象児とのかかわり方など、様々な問題点を考慮し、慎重に相談しながらセッションを進め、それぞれの対象児たちに対する音楽療法の効果を実証することができたと思われる。また、先生方二人は、毎回細かくセッションを振り返り、次のセッションを進めることができた。このことは、卒業生で音楽療法士の両先生が、児童領域の音楽療法士としてしっかり学び、実力をつけた結果となった。

今後も引き続き多くの対象児と、より丁寧なセッションを展開していきながら、本学の卒業生から、一人でも多くの音楽療法士の専門家が育つよう望んでいる。

（文責：学芸学部 音楽学科 和田 玲子）